

京鹿子

平成二十七年三月一日発行
通巻一〇八七号(毎月一回一日発行)



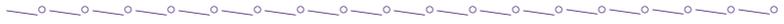
3月号

豊田都峰

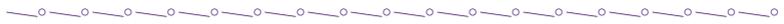
叡林集 その三



ひとすぢをよしとはずれの枯木立
冬耕はいたはり心の鍬つかひ
日当りの雪嶺を得る志
ふたみたび払ふくぼみの雪ばんば
天狼を指し得て春をとなりとす
三分計もう一度返し除夜とする



大 雪 の 二 日 続 き の 豊 の 年
神 奈 備 を 東 に 置 き 初 明 り
神 奈 備 の 初 東 雲 の 五 本 杉
大 寒 や 等 間 隔 に 幹 太 し
冬 晴 や 坂 ま た 坂 の 社 寺 め ぐ り
寒 鴉 一 望 の 丘 わ が も の に
芽 柳 の 風 の つ な げ る 川 ほ と り
芽 柳 の ゆ れ て は 岸 を ふ く ら ま す





—近詠—

鈴鹿
仁

犬ふぐり

きさらぎの底をたたけば風のこゑ
犬ふぐり口笛好きの人と逢ふ
よろずやの陶狸ひと役寒ゆるむ

—追懐—(その七)

隙あらば墓穴を掘らす狐ゐて
〔平成四年作〕

陽を舐めて天の沙汰まつ冬の蠅
〔平成四年作〕



— 近 詠 —

和田 照海

法金剛院

門院の沙汰模糊として藪柑子
敗荷や波紋の仔細遠流とも
ニタ巡りして仏心の柞の実
伏線のたどり違へて笹子鳴く
紅葉且つ散り細波は林泉を出ず

秀華採集

とめどなき木の葉の中のカメラマン

渡邊俊子

木の葉をあびて決定的瞬間を狙う。その結果は、二三枚の木の葉か、数枚の木の葉か、まさしく木の葉そのものが扱えられるが、省略の限りを尽くした表現を評価したい。

この道にまだ奥のあり龍の玉

片山熙子

カリヨンはきのふの余韻落葉道

山本正

「龍の玉」「落葉道」と、ともによい場を設定、それにふさわしい奥深さや、教風な雰囲気を組み合わせたことを手柄とする。



神麓集

嫁が君 藤岡 紫水
 音一つなき闇緊めて嫁が君
 死ぬまでが私の余生雪兔
 初競馬 愚弟賢兄紙一重
 水漬を見すかしてゐる貧乏神
 初手水くくみし水もやはらかし

日矢を追ふ

松本 鷹根

初句会湖族の郷は沖に日矢
 白菜は自肅の球に戦忌む
 枯れ極む野の光芒の中に寂ぶ
 冬田株踏めば童心ざくざくと
 郷愁は枯れの果てなる日矢を追ふ

地べたと悲しき言葉木の葉散る
 生き方に流儀はいらぬとろろ汁
 あの世まで運ぶ荷もなく木の葉散る
 とろろ汁三分の義理で啜りをり
 セロハンのやうな男の冬籠り

松田 都青

額くもひとつの言葉秋玲瓏
 北川 孝子
 秋気澄むはち切れさうな握り飯
 薄葉しぐれそろそろ怪し健康歴
 露けしや石の声聞く二条城
 日の短か湖の憂色はじまりぬ

冬 櫻

丸井 巴水

冬ざくら奇遇は神の遊びごと
 風神の閉ぢ紐ゆるむ十二月
 酒に塩枝垂れつくせり枯柳
 冬櫻二足歩行の負をかばひ
 雷鳥の白さに惚れて髪染めず

白猫のねむり預ける小春石
 塩貝 朱千
 ボジヨレヌーポー乾杯をして和食党
 冬將軍からす黒々群るる日に
 風信帖帰りは銀杏散る道に
 追へば消ゆまぼろしの世にしぐれ虹

銀杏散る

塩貝 朱千



京鹿子集

豊田都峰選

とめどなき木の葉の中のカメラマン

京都 渡邊 俊子

冬に入る遺愛の帽の出番です

冬はじめ焼かれて反りぬパンの耳

麦とろや母亡きあととは母として

この道にまだ奥のあり龍の玉

降りそそぐ陽のよりどころ帰り花

人違ひされお互ひに冬の鳥

かさこそと生きて枯葉になつてゐる

カリヨンはきのふの余韻落葉道

芦刈りやきのふの写生裏返す

山本 正

風小春谷を広げる道路鏡

吾も揺るぐ逆さ紅葉と反り橋と

冬温し心通ずる友が居て

感謝満つ一日の締めは雑炊で

大根切る音響かせて典座気分

帰国時は笑顔とびきり石路の花

どんよりと空は灰色雪催ひ

目ざめれば視界は真白雪つもる

初雪や予報はびたり銀世界

雪景色サックスギブンス感謝の日

伊吹 之博

水谷 直子

裏庭に法度の筈の焚火跡

札幌 野村 鞆枝

街道のふち彩れるななかまど

シヨウウインド自信あふれしシクラメン

北風や愚痴はこぼさぬ覚悟して

枝先に二葉を残し紅葉散り

酒田 藤波 松山

落葉道昭和の音が甦り

悩み事ひとまづ置いて炬燵出し

我が思ひ知るかのやうに庭枯るる

この年をまた振り返り古曆

渋川 東 秋茄子

古曆赤ラインをば振り返る

ころころと編む手はなるる毛糸玉

届く歳暮お互ひ健勝を祈る品

降り立てば瀬戸の海霧父母の里

さまま 神田 惣介

旅立ちの戸口に地震秋暑し

雨戸閉め家族息災虫の声

片言の孫と留守居や菊薫る

塔を消し藁を消して時雨くる

千葉 伊藤 希眸

噴火後の山裾はいま帰り花

浮雲の毛羽立つ真昼遠嶺は雪

ハイヒールの脚うそ寒し草堂古る

ぎりぎりの紅葉いつぱん風を聴く

直江 裕子

年用意この法螺貝をどうしやう

小春日は母の手ざはりガラス拭く

風吹けば金の耳もつ大銀杏

ポストまで小走りに行く寒さかな

冬晴れや明治文化の繭繰り機

銀漢や頂に飲むカプチーノ

残り柿漆喰塀に山日照る

石路の花指じんじんと玻璃を拭く

高野 春子

黄落に髓の染まりし旅鞆

はうじ茶を手囲ふ庭の冬紅葉

枯山や石の如くに生きてゐる

白壁の血脈のやう葛紅葉

丁寧に掃く老僧や冬隣

草ロール転がりしまま時雨れけり

兜煮の目玉ころがる十二月

彩散らす柿の落葉や外遊す

松戸 岡山 敦子

破蓮のざわめき選挙カーはしる

旅日記二つ三つの返り花

冬隣り所狭しと旅仕度

阿吽仏照葉の一寸づつ奥へ

思惟菩薩美男かづらは手の上に

後むく観音の肩雪ばんば

習志野 上野 紫泉

冬落暉抜け殻となり風となり

風呂敷につつむ挨拶文化の日

船橋 元橋 孝之

凧にないしよばなしを攫はれる

石路の花頼朝ひそむ島の洞

たはむれて炎たつ夜のかたき楯

県境を越えて遁走朴落葉

白菜の尻を競ひて売られをり

落葉散る徐々に剥がれる化けの皮

中山道六十九次初時雨

柿実る送迎バスの乗り降りに

娘と植糸し葉牡丹の鉢陽は西に

運動に落葉流るる川辺行く

美容室は女の世界木の葉髪

時雨来て雑木林の落ちつけり

柿熟るる鳥害除けの網かけて

道の辺に張り合うてゐる石路の花

新句集祝ふ句友や小六月

九条葱香りと音の朝餉かな

山眠る指笛に犬帰り来る

枯葉くるくる追ひかけてくる夕まぐれ

気塞ぎをとろり葛湯に融かしけり

本懐か名折れ鮫鱈吊るさるる

短日やまた怖い夢見てしまふ

虎河豚の肝に収めし自己主張

草落葉ここから先は行き止まり

みつけた赤き実ひとつ小さき指

陽に溢る無人の家の水仙花

異常気象ことしも咲かぬ銀木犀

狂ひ咲き紅葉はらはら紅つつじ

夫婦の日佳き人生と思ひたし

ともかくも心弾まぬ菊を剪る

寄鍋やころころ笑ひ過去を消し

残る葉をゆすり落して落葉掃き

酒蔵の寛政の梁小六月

バスは木曾無賃乗車の冬の蠅

青空とただただ樺の冬木立

さりりさり縦に霧水の音を聞く

木枯や背ナ丸々と本を読む

弁天の風の便りや実蓮飛ぶ

去る家の居間に大の字神在月

芭蕉句碑落ち葉の果ての深川めし

旅ひと日残し湖北に初しぐれ

風花の消えて夢とも現とも

ふる里の山も佛も眠りけり

火を埋み母のひと日の安かりき

中西 明子

夕暮はどこも地の果て雪ばんば

狐火や岩湯への道うる覚え

柿を剥く何もなき日のたふとくて

ゆるぎなき青空ありし枯蓮

冒ひかけし一語躓き木の葉髪

木枯や人の噂も吹き溜り

木枯や酔ふも怒るも果てはなく

黄落といふ寂光の中にある

初冬や富士の岨道まだ見えて

肩車この子は皇帝ダリアかな

しりとり豚で笑ふ子冬布団

银杏散る一列で行くランドセル

落葉舞ふ男を生きて高倉健

歳の市なに購ふや老夫婦

暮れそむる玄関までの石路明り

泡立草荒地放棄地俺わいのもの

飛行機と鴉飛んでる霜の朝

冷え渡る夜明け木曾路の遠きかな

椋鳥の群はいづこ羽休む

冬の星大河となりて輝やきぬ

選挙車の終日賑はふ師走街
白日に二人佳き日の冬日和

中島悠美子

山茶花や二人三脚門出なる
ペダル踏む青空広く冬木立

银杏もみぢ光集めて輝けり

ぎんなんを手にしき料理の企画かな

空晴れて真白き富士を遠見せり

まつば蟹丹後の海には人魚姫

竹めば己の見ゆる水の秋

涼新た窟の奥より水こだま

眉月を残して湖の暮迅し

冷まじき御利益札に長き列

うそ寒や身の程を知る同期会

捨ておきし鉢に一輪冬菫

凧や稜線いよよ尖りたる

追はば消え止まれば現るる雪ぼたる

鍵をして深々被る冬帽子

夜の音耳だして聴く冬帽子

ああみんな若者なのだ冬帽子

すきやきを喰みて五尺の雑魚寝する

時雨来て鳶は番で電線に

冷淡な気持もあり花終

根深掘柔き力で引き抜きぬ
冬の夜を飾るLED遊歩道

尾池 喜代

河島 坦

青梅 金子 野生

高尾 寛美

日野 伊藤 孝介

秋山甲武信

川崎 野村 冬魚

鈴木 眞貴

佐藤 正人

高井れい子